

四旬節第三主日 B年

2015. 3. 8

出エジプト 20・11-7

I コリント 1・22-25

ヨハネ 2・13-25

クラレチアン宣教会 長崎 壮助祭

今日の福音の中で、イエスは自分の復活を暗示して「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」(2・19)と、わたしたちの目をイエスの死と復活へと向けさせます。ユダヤ人だけが礼拝するための古い神殿の役割が終焉を迎え、動物のいけにえも要らなくなり、代ってイエスがただ一度自らをいけにえとして捧げることによって、すべての人を神との和解へと導く新しい神殿となったのです。

それにしても、神殿から商人や動物を追い出し怒りをあらわにするイエスの激しい姿には戸惑う人もいるのではないのでしょうか。

しかし、イエスの怒りのわけは、「わたしの父の家を商売の家にしてはいけない」という神への愛ゆえのことであり、この“愛ゆえの怒り”は言い方を変えれば“悲しみの極み”と言えるのではないかと思います。

なぜならイエスは貧しい人、罪人とされる人など神の慰めを必要としている人の友として関わっていきますが、同時にファリサイ派や律法学者というイエスに敵対する人々も含めたすべての人の救い望んでいたため、父の御旨を明らかにするためにはたびたびの対決も辞さなかったのです。ファリサイ派や当時の宗教的な指導者たちに対して異議を唱えず、おとなしくしていたら十字架の死に至る必要もなかったでしょう。イエスの敵対する人への思いは、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのかわからないのです」(ルカ 23・34)という十字架上の言葉からも明らかです。

このようなことを考えてみたときに、わたしたちがともに祈った今日のミサの集会祈願の意味、「イエスは生涯をかけてあなたへの愛に生きることを教えてくださいました。…四旬節の典礼を行うわたしたちがあなたへの愛を深めることができますように」という祈りの意味が明らかになってくるのではないのでしょうか。今日のミサは愛について考え、愛に生きることへの招きでもあると思います。

今年に入ってからの入門講座の中で、聖書に見られる「愛」という言葉についてお話したことがあります。その時間の中で普段あまり質問しない人も含めて多くの人から愛について質問され、どれだけ多くの人が愛ということに関

心を持っているかと驚いたことがあります。わたしたちが何か人助けをしようとするとき、相手の状況があまりよくならなくて、自分の行いが本当に相手のために良かったのかと悩んだという経験はきっと誰にでもあるでしょう。こういった悩みも、わたしたちがどれだけ愛について考え、真の愛を求めて生きているかの証拠であると言えます。

それではイエスの教えた愛とは一体どのようなものなのでしょう。聖書の中には、「隣人を自分のように愛せよ」また、「互いに愛し合いなさい」といったイエスによる愛の教えがありますが、イエスの生涯を見渡したときに一番イエスの愛の生き方としてわたしの心に響いてくるのは、「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく 仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように」(マタイ 20・26-28)というみことばです。この“愛のしるし”としての生き方の行き着く先が十字架の死だったのです。キリスト者にとって十字架は信仰のしるしですが、パウロは自らの宣教の体験から、十字架は「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」と言っています。彼らの目には十字架は苦しみと屈辱としが写らなかったのです。

しかし、こういった見方はわたしたちにとっても思い当たる部分もあるのではないのでしょうか。たとえば、わたしたちの身の周りで隣人愛を実践している人を見ると、愛するとは一見損をする生き方であるように思われることがあります。

愛に生きるということがこの世的な価値観からすると損をする生き方であると思うとき、わたしは神学校時代のひとりの先輩のことを思い出します。この先輩は長いサラリーマン生活を経て神学校に入ってきたのですが、学校を欠席したのを見たことがありませんでした。そしてあるときそのことについて尋ねたわたしに、「自分は風邪や高熱で神学校の授業を欠席したことがない。なぜなら、自分がこうして再び勉強できるのは自己実現のためでなく、将来司牧の現場に出た時の信者さんの役に立つためなので、休むわけにはいかない」と打ち明けてくれました。そして、入学間もないわたしに「トイレ掃除をすると心が爽やかになるんだよ」と言って、トイレ掃除の素晴らしさを教えてくれたのもこの先輩でした。後輩のわたしたちの尊敬を一身に集めていたのはこの先輩だったのです。目立たないところ、人から評価されないところで自分のことよりも先ず隣人のこと、将来出会う人々のことを考えていたこの先輩の姿は“キリストの愛の目に見えるしるし”として後輩たちの目に写ったのです。

再び聖書に目を移すと、使徒言行録が初代教会においてキリスト信者たちが心をつなげて神に祈り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって

一緒に食事をする姿が人々から好意をもたれた（使徒 2・42）ことを伝えてい  
ます。お互い神のもとでの兄弟として仕え合い、支え合って生きる姿がキリス  
トがどのような方であるかを示す“キリストの愛のしるし”となったのです。

わたしたちも神様の呼びかけに応え、日々の生活の中で愛のしるしとなっ  
ていけるよう、この恵みを願い求めたいと思います。このミサの中で御聖体のし  
るしのもとでイエスは今日もわたしたちを待っておられます。キリストと結ば  
れることによってのみ、わたしたちは愛に生きることが出来るようになるので  
す。